

島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 創刊号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
住所：〒690-8504
島根県松江市西川津町 1060
島根大学法文学部 長岡研究室
発行：2014年4月12日

ご挨拶

会長 常松正雄

島根大学ラフカディオ・ハーン研究会は、2006年11月に誕生したまだ歴史の浅い研究会である。この8年ばかりの間、それぞれの分野で責任を負った会員が、各自の仕事を熱心にこなしていること、また、創立以来事務局長の任にある横山純子さんの真に献身的な尽力による事務処理などのお蔭で、順調な歩みを続けている。

これまでの活動は、『教育者 ラフカディオ・ハーンの世界—小泉八雲の西田千太郎宛書簡を中心に—』（ワン・ライン、2006）、『小泉八雲論考—ラフカディオ・ハーンと日本—』（島根大学ラフカディオ・ハーン研究会、2008）、『小泉八雲の世界—ハーン文学と日本女性—』（島根大学ラフカディオ・ハーン研究会、2009）、『ニューオーリーズとラフカディオ・ハーン—「死者たちの町」が生む文化混淆の想像力—』（今井出版、2011）の出版と、会員による数回の研究発表に加えて、月例読書会を続けている。

本研究会は、基本的には島根大学の研究会で、会員資格は、原則として島根大学の現職教官、在学生および教官と学生のOBとなっているが、地元の文化発展にいささかなりとも貢献しようという趣旨で、ハーンに関心を持ち、ハーンの世界を熱心に探求しようとする地元市民にも門戸を開き、共にハーンの世界を究めようとする形で活動している。現在は、一般市民8名を含む23名の会員が活動を続けているささやかな研究会である。

月例読書会には、附属図書館の広い一室を利用させて頂き、理想的な環境で勉強できるのは

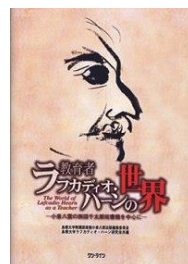
本当に有難い。この読書会は、われわれの活動の重要な一環として、今後もこれまでどおり続けていくつもりである。

これまでは、ハーンの東京帝国大学での、文学その他に関する講義を少し読んだ後、彼の作品をみんなでゆっくり読んでいる。毎回数人がテキストの和訳を担当し、それを中心にして、お互いに率直かつ気楽に意見や感想などを述べながら、真剣な中にも肩のこらない大変和やかな勉強会になっている。ハーンに熱心な関心を持つ学生および市民の皆さんには、気楽に仲間入りをして頂くことを歓迎するところである。

われわれは、これまでこのような活動を続けてきたが、このたび、会員相互の研究や親睦に資すると同時に、われわれの状況を国内の他のハーン研究会の皆さんに伝え、また皆さんからの情報をいただき、ハーン研究のより広い世界に目を向けて更なる努力を続けようと願って、ニューズレターを発行することにした。先行研究会活動を進められている方々のご指導、ご助言等をお願いする次第である。

本会会員の皆さんには、このニューズレターを有意義なものとするために、編集人と協力して、さまざまな感想、情報や研究小論などを積極的に投稿して頂くようお願いしたい。

(2014年2月15日)



『教育者 ラフカディオ・ハーンの世界 — 小泉八雲の西田千太郎宛書簡を中心に—』

【 研究小論 】

ハーンと “tsunami” について

常松正雄

OED の“tsunami”の項を見ると、次のような説明に出くわす。

“tsunami” (tsu:ˈna:mi). Also (repr. a strict transliteration of the Jap. form) tunami. [a Jap. *tsunami*, *tunami*. f. *tsu* harbour + *nami* waves.] A brief series of long, high undulations on the surface of the sea caused by an earthquake or similar underwater disturbance. These travel at great speed and often with sufficient force to inundate the land; freq. misnamed a *tidal wave* (see TIDAL. a.1b). Also *fig.* and *attrib.*

1897 1. HEARN *Gleanings in Buddha-Fields* i, 24 “*Tsunami!*” shrieked the people; and then all shrieks and all sounds and all power to hear sounds were annihilated by a nameless shock...as the colossal swell smote the shore with a weight that sent a shudder through the hills.

この大辞典は、編纂の最初の計画が立案された1858年から1928年の完成まで、実に70年の年月を費やしてやっと全巻が世に出たもので、他に見られない特色は、何と云っても、11世紀から20世紀までに出た出版物を虱潰しに目を通して、各見出し語に該当する語を使った実例を探し出して、その原文を歴史的原則に基づいて、古い初出のものから20世紀のものまで、1世紀に一つの例文を原則として、時代を下る形で提示していることである。完成時で、収容語数414,825語、用例は1,827,306の多くに及んでいる。本辞典が、現在、世界最大最善の英語辞典としての権威を保っているのも宣なるかなである。その後、補遺も出され、現在も新語の追加努力が続けているから、もっと新しい用例も見られることであろう。

さて“tsunami”の項で、明治30年に出版されたハーンの『仏の畑の落穂』の初頭の「生き神様」からの引用文が最初に乘せてあるのは、“tsunami”という言葉は、英語ではハーンのこの文が初めてであるということの意味している。現に、「ハーンは“津波”という日本語を英語に取り入れた最初の人である」と言われているのを耳にする。

ところが実は、ハーンの「生き神様」が出る前年

の1896年9月に出た *The National Geographic Magazine* に、“On the evening of June 15, 1896, the northeast coast of Hondo, the main island of Japan, was struck by a great earthquake wave (*tsunami*), which was more destructive of life and property than any earthquake convulsion of this century in that empire.” (p.285) で始まる “RECENT EARTHQUAKE WAVE ON THE COAST OF JAPAN” (pp. 285-89) という論文を掲載していた人物がいたことが近年分かった。

この論文の著者は、アメリカの作家、写真家、地理学者エリザ・ルアマー・シドモア (Eliza Ruhamah Scidmore) というナショナル・ジオグラフィック協会初の女性理事になった人物で、Wikipedia には、エリザ・シドモアの項に既にこの事実が記載されている。1856年生まれの人、東洋への旅行をしばしば行なっていて、日本に関する著作も何冊もあり、「1885年にワシントンへ帰国する際に、ワシントン D.C. に日本の桜を植える計画を着想した」と述べられている。

筆者の読み誤りがなければ、上記の論文には“tsunami”が4回使用されている。これにより OED はこの資料を読み落としていたことが明らかである。従って、OED の“tsunami”の初出用例としては、ハーンの文ではなく、明治29年の三陸地震津波の被災地に入って取材して書かれたこの文を載せ、ハーンの文は2番目に載せなければならない。

付記 ここに使用した資料の入手には、島根大学附属図書館の加本純夫、松崎洋子両氏その他のご助力を頂いた。厚く御礼を申し上げます。

(2014年2月15日)

【 読書会に参加して 】

的確な言葉

副会長 吉川 進

ラフカディオ・ハーン研究会は毎月1度の読書会であり、常にハーンさんの観察力・表現力に感心する。伝えるべき内容がこの言葉しかないと思える適格な言葉で表現されている。最近、日常生活において、言葉の持つ力を意識することがある。具体例をいくつか挙げてみたい。

この数年アメリカ大リーグでの日本人選手の活躍は目覚ましい。ヤンキースの黒田投手は日本の広島カープから渡米し、ドジャース、ヤンキースで先発

投手として活躍している。精密器械のような制球力であるが、味方の打線が不調なこともあり、勝ち負けはおおむね 13 勝程度だ。年間 200 イニング以上投げ、防禦率は毎年 2 点台 (9 イニング投げて失点 2 程度) である。先発すれば 6 イニングは投げ切る。試合の流れが劣勢でも黙々と責任回数を投げる。負け投手になっても一切愚痴をこぼさぬ。牛のような粘りがある。大リーグ史上最高といわれる元監督トリー氏は、黒田の感想を求められ、ただ一語で評した。“Trustworthy.” 数年部下と共に戦った名将の言葉である。

次に、テキサス・レンジャーズで活躍しているダルビッシュ投手について、相手チーム (ヤンキース) の監督ジェラルディは試合後彼の印象を求められ、“Brilliant” と言い切った。彼は球種を 5 種類以上もち、そのいずれも一級品と評されている。大リーグの三振奪取王、サイヤング賞候補第 2 位。監督はこの投手に最高の言葉を捧げた。POD の定義は、“brilliant: 1. adj. Bright, sparkling, distinguished, talented, showy. 2. n. Diamond of finest quality cut in two flat faces joined with facets.”

次も大リーグのエピソード。ワールドシリーズでレッドソックスの上原投手が最終戦で勝ち、数万人の大観衆の中でインタビューを受けた。続いてマイクは小学生の息子に向けられると、よく通る声でただ一言、“Excited!” 球場全体は短い静寂ののち、やがて唸り声に包まれた。

さらにもう一つ。戦後まもなく吉田茂内閣で政権の影武者として主に対英外交で力を発揮した白洲次郎 (白洲正子の夫) のエピソード。白洲の知人が英国で就職したいと思い、彼に紹介状を依頼した。白洲はこれを受け入れた。英国側がこの紹介状を開くとそこには、たったの 3 文字が書かれていた。“I know him.” この知人は直ちに英国で職を得た。

これらの簡潔で力強い言葉は、その背景に豊富な物語を備えている。別の見方をすれば、ある事実・出来事がいかにして的確な言葉に凝縮されているのか、それを見抜くのは楽しいことである。

(2014 年 3 月 16 日)

【 ハーンとわたし 】

私にとってのハーン

ヒラタ・エレナ

私の故郷のサン・パウロの青空には、ぽっかりとくっきりと大きな綿菓子やシュークリームのような

雲が浮かんでいた。



サン・パウロの空 撮影：Fernando Miyamoto 氏

父の故郷の松江は、空一面にうすい墨を流したようで、小高い山々に霧がかかったモノトーンの層雲の段階的变化と蒼や灰色が混ざった濃淡の世界であった。



松江の空 撮影：Bernice Ní Dhiomsaigh 氏
Facebook Made in Matsue より

父からは『ヤマタノオロチ』、『因幡の白兎』や『耳なし芳一』、『飴買い女』の話を寝る前に聞かされていた。

「病」も「死」も「別れ」も「貧困」も知らなかった 27 年前の私が松江に来た時に感じたのは、「日本ってなんて霊的なのだろう」ということであった。

そして、陽気なところから来た私は、そこはかたない「哀しさ」を知ったのであった。つまり、故郷での半生における「影」は「光」の後ろにすっぽりと隠されていたのであった。

まるで、カーニバルの「光」と「影」のように…「陶酔」と「幻想」の後ろに隠れたのであった。

ハーンと私の関係はその「哀しさ」の解明にあった。

地球を半周し、四半世紀を超えたこの長旅で感じたことは、人間というのは完全に満たされた状態よりも満たされぬ状態の時こそ、得るものが大きいということであった。

ハーンの本物を読むうちに、人間は哀しみを十分に悲しむことなく生きているということに気付いた。

ハーンとは私にとって、涙が枯れるまで哀しむ機

会を与えてくれ、魂を洗い流してくれる作家であった。
(2014年3月16日)

【 読書会の記録 】

事務局長 横山純子

島根大学ラフカディオ・ハーン研究会は過去出版活動や二回研究発表会もしてきましたが、読書会は今も継続的に1か月にほぼ一回の割りあいで行っています。

第1回読書会

日時： 2007年11月18日 日曜日
午後2時から
場所： 島根大学附属図書館三階の
八雲文庫室
テキスト： “The Value of the Supernatural in Fiction” (*On Art, Literature and Philosophy*, 北星堂書店, pp. 115-127, 1932)
参加人数： 10名

初めに高瀬先生が今後の活動について話された後、それぞれが自己紹介を行ってから、テキストの読みに入りました。ハーンの言う“ghostly”、“supernatural”なものは何だろうか等と皆で話しながら、和気あいあいの雰囲気ですれすれながら楽しい滑り出しでした。

話の中で、常松先生が題名の“The Value of the Supernatural in Fiction”の“Fiction”は「小説」ではなくて「創作」ととるのが本当ではないかとハーンの意図を汲み取る際の基本的な解釈について指摘され、長岡先生が“the Supernatural”を「超自然」と言語化する問題に対してそれは「自然を超えていくこと」であり、ハーンがこの講義をした世紀の変わり目はフロイトに見られるように自分の中に自分がコントロールできないものがあるという無意識の発見の時代であったことを示唆されました。

他にも“pleasure in the literature of the supernatural”の“pleasure”には“ghostly”なものに対する恐ろしさも含まれるのではないかと意見ができました。研究会設立の目的の一つだった意見交換の場ができ、嬉しいことです。

このようにして始まったこの読書会は、最初はラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)の講義録を読んでいましたが、今はハーンの本を書いた作品を読んでいきます。

今は昨年度から引き続き、ハーンの本の1894年に出版された *Glimpses of Unfamiliar Japan* に所収された“The Japanese Smile”を島根大学図書館2階のラーニング・コモンズ2で読んでいます。

第53回読書会

2013年10月5日(土) 総会后 15:45~16:00
上記テキストの p.670,l.14~p.671,l.6
14名参加

第54回読書会

2013年11月2日(土) 14:00~16:00
p.671,l.6~p.674,l.8 10名参加

第55回読書会

2013年12月14日(土) 14:00~16:00
p.674,l.8~p.679,l.12 13名参加

第56回読書会

2014年1月25日(土) 14:00~16:00
p.679,l.13~p.683,l.10,脚注 p.682~p.683
13名参加

第57回読書会

2014年2月15日(土) 15:00~17:00
p.683,l.12~27 “The Japanese Smile” 終了
島根大学法文学部 340 教室 15名参加

この日は“The Japanese Smile”について話す時間を持ちました。日本人と他の国の微笑と違いがあるか等を話して、武士の‘grim smile’等笑いについて様々な話が出ました。日本人は感情、特に怒りを外に出せない又はそれを出してはいけないと思っているという点で違いがあるのではないかと議論しました。そして日本人は怒りの処理の仕方を教えられていないという問題点を長岡先生が指摘されました。一方で今の日本の母親は、家の中のことでしょうが、いつも子供を怒っているのではないかと話も出て、日本女性の話に至り、楽しく議論しました。

第58回読書会

2014年3月16日(日) 14:00~16:00
“At a Railway Station” 14名参加
島根大学法文学部 340 教室

編集後記： まずは創刊号です。次回は10月発行予定です。是非みなさまのご投稿をお願いいたします。ハーンに関連するものであれば分野は問いません。(高橋栄)
